2024.1.17
（第三種郵便物認可）

# 中経論壇

経営支援NPOクラブ参与
吉田　仁

## みちのく裂き織の魅力

# 企業マッチングで広がる可能性

「モッタイナイ」は、物を繰り返し大切に使う日本人の心を表す言葉として、ノーベル賞受賞者のワンガリ・マータイさんにより世界に広がった。国連の主導によって、サステナブルな社会を目指す今こそ、日本の伝統的なリサイクルの文化を見直すべきと感じている。きっかけは、最近「裂き織」に再び関係することになったことである。

古布を裂いて新たに布を織りあげる、裂き織という技法がある。寒冷で貧しかった東北で、江戸時代中期に始まったようだ。これに魅了された石頭悦さんは、盛岡の伝統芸能さんさ踊りの浴衣を活用して、裂き織を製作する会社「幸呼来（さっこら）Ｊａｐａｎ」を立ち上げた。幸呼来とは、さんさ踊りの掛け声で、これを社名にしたのだという。

石頭社長が裂き織に魅せられたきっかけは、障害者支援学校を視察した折に、生徒の織る裂き織に出会ったことであり、そうしたことから現在23人の社員中15人が障害のある方である。社員の感性による世界に一つの美しい製品を紡ぎだしている。

当ＮＰＯでは、10年ほど前に東北大震災復興支援として、被災企業の販路開拓のお手伝いをさせていただいたが、その中に幸呼来Ｊａｐａｎが入っていた。その時、私も裂き織で制作した帽子や財布などの販売先を同社に紹介するよう努めた。現在は、企業から古布の提供を受け、裂き織にして布のまま返すというビジネスモデルをとっている。企業からの裂き織の要望が多く、自社での商品化の余裕がなくなっているためという。

裂き織は、横糸に古布を裂いて作った糸を使うが、経（たて）糸は一般の糸を使用する。今般、この経糸用に木材チップから作った糸を紹介することになった。ものを使い切るという理念のもとに、木材チップから糸を作る徳島県の会社を知り、自然素材を生かして使うという理念が共通しているところから、石頭社長に紹介することにしたものである。面談の結果、経糸として木材チップ糸を使うこと以外に、裂き織を内装材として活用するなど、両社の構想は広がりを見せている。

「モッタイナイ」をキーワードに、伝統技術に新技術が加わり、障害のある人の手になる裂き織から新しく生まれる製品には、懐かしさと温もりが感じられよう。新たな可能性が広がることは、企業マッチングに携わる者の喜びである。